DYNAMIS, 7 (2003), 41–56

ツツバ語の動詞に関する考察

—非人称動詞、(その他の) 自動詞、他動詞への分類—

内藤 真帆

0. はじめに

南太平洋に位置するヴァヌアツ共和国は83の島々から構成されており、そこではツツバ語を含む105あまりの現地語が用いられている。異なる現地語話者のあいだではビスラマ語という共通語が使用され、この言語は英語、フランス語と並んで国の公用語である。また、教育で使用される言語としては英語とフランス語の二つが規定されている。

ツツバ島の人口はおよそ500人、その大半は20歳未満であり、若い世代はビスラマ語の語彙借用が目立つ。島には小学校が一校存在し、そこでは英語の使用が義務付けられているが、英語がツツバ語に及ぼす影響はほぼ観察されないと言って良いだろう。一方、近隣の現地語やビスラマ語の語彙は頻繁に借用されている。

ツツバ語の記述を試みるには、基礎語彙を収集し、音素や音韻に関する考察を行うところから着手する必要があった。本稿は、音素、音韻を考察することを目的として収集した語彙と簡単なテクストを資料とし、動詞について分析したものである。得られた資料は豊富ではないため、動詞の分類は細微にわたったものではないが、現時点で明らかになった事柄を記述し今後の調査研究につなげることを本稿の主眼とした。そのため、得られた言語事実の理論的分析や一般的考察などは本論の課題の範囲外としている。

1. 音素

ツツバ語の動詞に関して記述する前に、この言語の音素について簡単に触れることにする。

ツツバ語は母音/i e a o u/、子音/b t d k m n ŋ β s h ɾ l (m̈[1]) (b̈)/から構成されており、/m̈/, /b̈/のふたつは舌唇音 (liguo-labials 、もしくは apico-labials) と呼ばれ、舌先が上唇の中心に接して調音される。この音はヴァヌアツの中では主にサント島とマ

[1]これらの表記は、linguo-labial について記してあるヴァヌアツ共和国 Araki 島の言語記述 (François 2002: 15) に倣った

レクラ島で発見されているが、世界的には非常に珍しい音である (Maddieson 1989)。2003 年の現地調査で初めてこの音がツツバ語においても用いられているという事実を確認できたため今回新たに子音の音素に加えたが、可能性としてはツツバ語に三つある両唇音/b, m, β/のうち、残る/β/に対応する舌唇音も存在する、もしくはしていたのではないかと考えられる。この点に関しては今後も考察を続ける必要があるだろう。2003 年の調査では、ツツバ語話者 500 人のうち両親が言葉に厳格であったという 50 代男性と数人の高齢者のみに〔m̈〕,〔b̈〕を確認することが出来た。彼らの発音からこれらの音がそれぞれ〔m〕,〔b〕と対をなし、/m̈/と/m/, /b̈/と/b/が最小対となる例も確認出来たが、現在では〔m̈〕,〔b̈〕が〔m〕,〔b〕の異音としてあらわれることが多いため、括弧を付して音素に加えた。

ツツバ語の子音は音声上、次のような特徴を有している。音素/b/と/d/は前鼻音化閉鎖音であるが、これらの音素が語頭にあらわれ、かつそれらの語が強調されない場合においては鼻音が脱落する。また、/β/は世代により音がいくらか異なっている。たとえば 70 代には有声両唇摩擦音で発音され、10 代には無声唇歯摩擦音と有声唇歯摩擦音、そして時には無声両唇摩擦音で発音される。10 代に観察されるこれら 3 つの音は自由変異の関係である。/d/はそり舌であらわされ、/t/の調音点は歯茎とやや前よりである歯裏の 2 箇所であり、これらも自由変異の関係にある。本稿では今後、文字に転写する際/β/を f、/ŋ/を ng、そして/ɾ/を r と書きあらわすことにする。また、前鼻音化閉鎖音である/b/, /d/はそれぞれ mb, nd と実際の発音に近い表現を用いて記述することにする。ただし、前鼻音化閉鎖音の鼻音部分は語頭では脱落する傾向にあるので、特に強調してそれらが発話される状況でない限り、b, d とあらわすことにする。

2. 文の構造

ツツバ語の基本語順は SVO である。動詞には主語の人称、数をあらわす主語代名詞が先行し、他動詞には目的語代名詞が後続する。これらはともに接語である。

例 1：

(nao)	nno	annan	mef
(1SG.IP)	1SG.	eat	already

I have eaten already.

(nna)	me	isi	a
(3SG.IP)	3SG	touch	O:3SG

He touched it.

2.1. 人称代名詞

独立主語代名詞 (Independent pronouns) は文頭に主語としてあらわれ、主語代名詞 (Subject pronouns) は動詞の後接語で主語標識の役割を果たす。また、独立主語代名詞と同形である一人称複数 (排除的) と二人称複数を除く目的語代名詞 (Object pronouns) も他動詞の前接語である。以下に人称、数に応じたそれぞれの代名詞を示す。

		独立主語代名詞	主語代名詞 (主語標識)	目的語代名詞
単数：	一人称	nao	nno	ao
	二人称	nno	o	o
	三人称	nna	mV	a
複数：	一人称複数 (包括的)	ninda	do	da
	一人称複数 (排除的)	kaman	ko	kaman
	二人称複数	kamiu	ko	kamiu
	三人称複数	nira	ro	ra

これ以外の数としては、双数、三数、使用頻度の低い四数などがある。今回はこれらのうち、現時点で明らかとなっている双数と三数のなかでもそれらの一人称 (排除的)、二人称を下に記した。

双数：	一人称 (排除的)	kamerua	:	kame	+	rua
	二人称	kamiruo	:	kami	+	rua
三数：	一人称 (排除的)	kametol	:	kame	+	tolu
	二人称	kamitol	:	kami	+	tolu

kame-一人称 (排除的)　kami- (二人称)　-rua (2)　-tolu (3)

双数、三数は、それぞれ独立主語代名詞の一人称 (排除的) をあらわす形態素 kame、二人称をあらわす kami に、具体的数である 2 をあらわす形態素 rua、3 をあらわす形態素 tolu が後続してあらわされる。

2.1.1. 独立主語代名詞の省略

主語の位置にある独立主語代名詞の多くは省略されるが、主語が強調される場合や二者間などで相手の注意を喚起したい場合においては省略されない。また、主語である独立主語代名詞は省略されることがあるが主語代名詞が省略されることはなく、これにより文の主語を特定することができる。

一人称単数　(nao)　nno　in　ti
1SG.IP　1SG　drink　tea
I had a cup of tea.

二人称単数 (一般的：独立主語代名詞の省略)
(nno)　o　ntai　tasinde
(2SG.IP)　2SG　see　sea
Did you see the sea?

二人称単数 (人称の強調、注意を喚起)
nno　o　loso　mef
2SG.IP　2SG　bathe　finish
You, have you bathed already?

2.1.2. 主語代名詞

先の表記で三人称単数の主語代名詞を mV としたのは、m に後続する母音が動詞語基の第一母音と調和するためである。母音調和は次のようになされる。動詞語基の第一音節の母音が/i/であるとき、代名詞接辞の m に後続する母音は/e/となり、動詞語基の第一音節の母音が/u/であるときは、代名詞接辞の母音は/o/となる。それ以外の母音/e, a, o/が動詞の第一音節の母音であるとき、主語代名詞の母音は動詞語基の第一音節の母音と一致する。

例 2：　mV 動詞語基

me　(nna)　me　isi　a
(3SG.IP)　3SG　touch　O:3SG
He touched it.

me　(nna)　me　felu
(3SG.IP)　3SG　dance
He danced.

ma　(nna)　ma　mae
(3SG.IP)　3SG　come
He comes.

mo　(nna)　mo　tofi　a
(3SG.IP)　3SG　call　O:3SG
He called it.

mu　(nna)　mo　lusu　sam
(3SG.IP)　3SG　hit　O:Sam
He hit Sam.

また、否定の接語 te は主語代名詞に後続するが、このとき主語代名詞は否定の接語 te の母音 e に調和し、me となる。

(nna)　me　te　tofi　a
(3SG.IP)　3SG　NEG　call　O:3SG
He did not call it.

この言語は自動詞文と他動詞文の主格を表示する形式は同じであり、他動詞構文の目的語を表示する形式が異なることから、対格言語であると考えられる。

3. 動詞

本稿では、どのような体系を有するか定かでないツツバ語の動詞を記録するという目的のもと、動詞を次の三つに大別した。

①非人称動詞　② (その他の) 自動詞　③他動詞

今回の分類はあくまでも動詞記述の上での一通過点に過ぎないため、正確かつ精密な分類には今後の調査研究が要される。

①の非人称動詞には雨が降る、暗くなる、など自然界の現象をあらわす語が属する。
②の自動詞には、泣く、ジャンプする、眠るなどがある。また、存在動詞もここに属する。

③の他動詞には押す、たたく、割るなどの、行為者と目的語の両方を必要とする動詞が属する。

大別した上の三つについてはそれぞれ詳しく次の 3.1 から 3.3. で取り上げ、続く 3.4 では自動詞を他動詞させる接辞-i、-tei を、3.5. では使役動詞のような働きをする fai について述べることにする。

3.1. 非人称動詞

自然界の現象には非人称動詞が用いられる。この動詞は主語に名詞句や独立主語代名詞をとることは出来ないが、代わりに形式主語 (dummy subject) をとり、主語代名詞はいかなる時も三人称単数である。

では例を見てゆくことにする。

mo　usa
3SG　rain
It rains.

me　mi
3SG　earthquake
There was an earthquake.

me　biri
3SG　thunder
It thundered.

mo　dondo
3SG　dark
It became night.

3.2.(それ以外の) 自動詞

眠る、ジャンプする、風呂に入る (水浴びする) などに加え、存在動詞がこれに属する。

3.2.1.(一般的な) 自動詞

一般的な自動詞の例を下に挙げる。

Moris　ma　matul
Moris　3SG　sleep
Moris slept.

nno　mbae
1SG　jump
I jumped.

dao　da　si　da　loso
DL(inc).IP.　DL　go　DL　bathe
I and you went to bathe.

3.2.2. 存在動詞

存在文における肯定動詞と否定動詞も自動詞である。存在文における肯定の動詞は rei（～がある、いる）、否定の動詞は tete（～がない、いない）であり、否定文では否定の接語は不要である。

はじめに否定動詞と肯定動詞の違いを箇条書きで以下に示す。

① 存在をあらわすときに用いられる動詞は、肯定と否定とでは異なる。肯定の動詞には rei が、否定の動詞には tete が用いられる。
② 意味上の主語があらわれる位置は肯定動詞と否定動詞とでは異なる。肯定文では形式上の主語位置 (文頭) にあらわれ、形式上と意味上の主語の位置が合致するのに対し、否定文では意味上の主語は動詞 tete に後続する。また、否定動詞 tete は形式主語をとる。
③ 人称、数に関わらず肯定動詞と否定動詞の主語代名詞は、三人称単数である。

では具体例を見てゆくことにしよう。はじめに、肯定文を示すことにする。

肯定の動詞　rei (exist)
Vanuatu　baeo　me　rei
Vanuatu　breadfruit　3SG　exist
There is breadfruit in Vanuatu.

次に、否定の動詞が用いられている例を示す。

否定の動詞　tete (non exist)
me　tete　a
3SG　NEG.exist　it
No, there is not any.

Japan　me　tete　baeo
Japan　3SG　NEG.exist　breadfruits
There is not breadfruit in Japan.

二つ目の文は場所を示す語から始まっている。これは対象物の存在の有無を日本とヴァヌアツにおいて比較したため焦点化されて文頭にあらわれたと考えられ、主語では

ない[2]。また、肯定文、否定文ともに場所を示す語が主語代名詞に与える影響はない。

最後に、一文中に肯定動詞と否定動詞の両方が用いられている例を示す。

Japan　me　tete　mako　na　apple　me　rei
Japan　3SG　NEG.exist　mango　but　apple　3SG　exist
In Japan, there are not mangos, but there are apples.

3.3. 他動詞

他動詞には目的語代名詞が後続する。他動詞の語末はiであることが多く、これは他動詞の特徴であると考えられるが、中には子音rやmで終わる他動詞も存在する。そのような他動詞が目的語に代名詞をとる場合、動詞の語末にはiが付加する。

3.3.1. (一般的な) 他動詞

見つける、好む、噛むなどの語を一般的な他動詞の例として挙げる。

ro　sori　a
3PL　find　3SG:O
They found it.

(nno)　o　mboi　a
2SG.IP　2SG　like　3SG:O
You like her.

lamoi　ma　ati　ao
mosquito　3SG　bite　1SG:O
A mosquito bit me .

3.3.2. 動作主＝被動作主となる他動詞

molum 'tire something' は他動詞であるが、主語代名詞と同じ人称、数の目的語代名詞をとることができる。たとえば、「私は疲れている」という意味を伝えたい場合、動詞に一人称単数の主語代名詞が先行し、目的語には一人称単数の目的語代名詞があらわれる。このとき、これを額面どおりに訳すと「私は私を疲れさせる」'I tire me.' となるが、主語に特別な意図がなくともこのような構造をとる。逆に、意図的であった場

[2]場所を示す語があらわれうる位置に関しては今後の調査を必要とする。

合、無生物が主語であった場合、目的語の位置にあらわれる人称とは異なる生物が主語である場合にどのような文構造になるのかは今後調査する必要がある。

nno　molum　ao
1SG　tire　O:1SG
I am tired　(lit. I tire me.)

3.3.3. 他動詞の特徴

ツツバ語は V, CV, CVC, VC, CCV の五つの音節から構成されており、このうち CV を基本構造としている。自動詞、他動詞はともに形態的な特色を有せず、両機能を有する動詞は多くの場合において同形である。自動詞、他動詞のいずれも語末は母音であることが多いが、他動詞の語末にあらわれる母音は i であることが多い。ただし自動詞の中にも i で終わるものはある。

例	自動詞	他動詞	
	lefete 'sing'	soai	'push something'
	ngara 'cry'	isi	'touch something'
	falao 'run'	balati	'close something'
	findi'fly'	dafsai	'understand something'
	merei 'exist'	dufndufsai	'think something'

3.3.4. 目的語による他動詞の形態変化

動詞の語末が CVC 構造であるとき、目的語の位置にあらわれるのが独立した語であるか、それとも目的語代名詞であるかにより他動詞の形態は変化する。CVC 構造の音節末にあらわれる子音は鼻音 m, n, ng と f, r, l の六つであるが、目的語に名詞をとる場合、動詞語末は子音のままで変化しない。しかし、目的語代名詞をとる場合、CVC 構造の音節末に i が付加し、CVC. から CV.CV(i) と変化する。

目的語に独立した語をとる場合

mo　fol　(te)　cofi
3SG　buy　(pp)　coffee
He bought a cup of coffee.

目的語代名詞をとる場合

mo	foli	a		mo	foli	ra
3SG	buy	it		3SG	buy	them
He bought it.				He bought them.		

3.4. 自動詞の他動詞化

次に示す 沈む—沈める の例に見るように自動詞と対をなす他動詞が存在する一方、接辞が付加することにより他動詞化する自動詞も観察された。多くの場合、自動詞を他動詞化させる接尾辞は -i であったが、接尾辞 -tei により他動詞化する語もいくつか存在した。いずれの接尾辞も接辞末が i である点において共通している。

Vemol	mo	ndono	nanof
Vemol	3SG	sink	yesterday

Vemol sank yesterday.

Vemol	mo	ndun	akandui	nanof
Vemol	3SG	sink	canoe	yesterday

Vemol sank the canoe yesterday.

次に挙げるのは、自動詞に接辞 -i, -tei が付加して他動詞化した例である。
なお、S は自動詞主語、A は他動詞主語、O は他動詞目的語を意味する。

sale (float)

自動詞	akandui	ma	sale
	canoe	3SG	float

The canoe floats.

S → O

他動詞化	nno	sale-i	selen	no-ku
	1SG	float	coin	CLFR-P:1SG

I sank my coins.

mana (laugh)

自動詞	nno	mana	
	1SG	laugh	
	I laughed.		

S → A

他動詞化	nno	mana-tei	a
	1SG	laugh	3SG
	I laughed at him.		

3.5.fai

いくつかの動詞は使役の機能を担うと考えられる動詞 fai [3]と共起し、文を構成する。たとえば倒れる、転ぶ (fall down) をあらわす自動詞が fai とともに用いられた場合、fai(使役性) +「倒れる、転ぶ」=「〜を倒す、転ばせる」という意味になる。このように fai が用いられる最も単純な文の構造を簡略化してあらわすと、以下のようになる。

〈動作主〉fai　[〈対象〉動作]

fai が用いられる文は最低二つの節から構成され、ここでは以後 fai を第一動詞、続く節の自動詞を第二動詞として扱うことにする。この構文において、第一動詞 fai の主語は〈動作主〉であり、第二動詞 fall down などの被動作主となるのは〈対象〉である。

fai の用いられる文をさらに詳しく示すと、次のようになる。

行為者の主語代名詞 + fai + 目的語・目的語代名詞
+ 目的語・目的語代名詞の人称、数に呼応する主語代名詞 + 自動詞

第一動詞 fai には動作主の人称、数に呼応した主語代名詞が付加し、同様に第二動詞にも fai の目的語、目的語代名詞の人称・数に呼応した主語代名詞が付加する。

以下、第一動詞である fai の目的語に名詞をとる場合と目的語代名詞をとる場合に分けて、それぞれの例を見てゆくことにしよう。

[3]fai は使役動詞と思われる働きをするが、現段階でそのように断定することは難しく、今後考察を続ける必要がある。また、どのような動詞と共起可能であるかに関しても、更なる調査が要される。

3.5.1.fai の目的語に名詞をとる場合

はじめに、自動詞 'fall down' を用いた例を挙げる。下の例文のうち、最初に示したのは fai の用いられていない普通の自動詞文であり、その次に示したのが fai の用いられる文である。なおここでは fai の目的語に代名詞ではなく、固有名詞、普通名詞を用いた場合の例を挙げている。

Vemol　mo　sofi
Vemol　3SG　fall down
Vemol fell down.

nno　fai　Vemol　mo　sofi
1SG　caused　Vemol　3SG　fall down
I caused Vemol fall down.

3.5.2.fai の目的語に目的語代名詞をとる場合

fai が目的語代名詞をとる構文では、文の主語と動詞 fai に付加する主語代名詞の人称数が一致し、目的語代名詞が fai に後続する。同様に、目的語代名詞と第二動詞に付加する主語代名詞の人称・数が一致する。はじめに挙げた例は '驚かせる (startle)' を用いた通常の自動詞文であり、次に fai とともに用いた例を挙げている。

nno　maturei
1SG　startle
I was startled.

S → O

nno　fai　o　o　maturei
1SG　get　O:2SG　2SG　startle
I startled you.

ただし、育つ (grow) を意味する語 ulua は人・動植物を主語とすることができるが、fai とともに用いられ、〜を育てる (grow something) の意味になった場合、人を目的語にとることはできない。

bitinao　mo　ulua
child　3SG　grow
The child grew up.

* nno	fai	bitinao	mo	ulua
1SG	get	child	3SG	grow

（植物、動物を目的語にすることはできる。）

まとめ

本稿ではツツバ語の動詞に焦点を当て、動詞の分類を行った。また、どのような動詞がそれぞれの分類に属するのか、例を挙げて説明した。残念ながら豊富な資料をもとに動詞を分類したとは言いがたく、今回の分類はあくまでも動詞記述の上での一通過点に過ぎない。そのため、現時点で明らかになった事柄を記述し、今後の調査研究につなげることを本稿の主眼としている。

ツツバ語の基本語順はSVOであり、動詞には主語の人称、数をあらわす主語代名詞が義務的に後接する。また、他動詞には目的語代名詞が前接する。主語の位置にあらわれる独立主語代名詞は多くの場合において省略されるが、主語代名詞が省略されることはない。

本稿では動詞を①非人称動詞、②(それ以外の)自動詞、③他動詞の三つに分類した。①には雨が降る、暗くなるなど自然界の現象をあらわす語が属し、②には眠る、泣くなどに加え、肯定と否定の存在動詞が属している。③に属する動詞には押す、たたく、割るといった目的語を必要とする語が挙げられる。また、③に属する他動詞として、主語と目的語の人称、数が一致するtireがあった。これは直訳すると、私が私を疲れさせる、となる。このような動詞はツツバ語の中で他にまだ見つかっていない。

他動詞の特徴の一つに、語末にあらわれる母音はiが多いという点が挙げられる。他動詞の語末がCVC構造であり、なおかつ目的語に目的語代名詞をとる場合、語末に母音iが付加してCV.CVとなるケースも見られた。

またいくつかの自動詞には接尾辞i、teiが付加し、他動詞化するものもあった。これらの接尾辞には自動詞を他動詞化する働きがあると考えられる。

動詞のうち、倒れるなどは使役動詞のような振る舞いをするfaiという動詞とともに用いられることが分かったが、この動詞faiが使役の動詞であるのかどうかは今後の調査と考察によって明らかにしてゆく必要がある。

今回の分類は今後の研究につなげる一時的なものであることは先に述べたが、この分析を通じて、より深い考察を実現するために調査すべきだと考えられる箇所が明らか

になった。今後はそのような箇所を重点的に調査し、豊富な資料を揃えたうえで動詞の正確かつ精密な分類に臨みたい。

【謝辞】

インフォーマントとして協力してくださった Elizabeth, Sara, Suzan, Tura、そしてその他のツツバ島に住む皆さん、どうもありがとうございました。また調査のアドバイス、考察する上でのご指導を戴いた三谷惠子先生、大角翠先生、本当にありがとうございました。ここに記して深甚なる謝意を表します。

参考文献

影山太郎 編 2001
『日英対照動詞の意味と構文』 大修館書店

A. François. 2002
Araki: A Disappearing Language of Vanuatu. Canberra: Pacific Linguistics. Pacific Linguistics 522. The Australian National University.

J. Lynch. 1998
Pacific Languages: An Introduction. Honolulu: University of Hawai'i Press.

J. Lynch and T. Crowley. 2001
Languages of Vanuatu: A new survey and bibliography. Canberra: Pacific Linguistics 517. The Australian National University.

D. Tryon. 1976
New Hebrides languages: An Internal Classification. Canberra: Pacific Linguistics, C-50. The Australian National University.

I. Maddieson. 1989
"Linguo-labials" In *VICAL1* (Oceanic languages) - Papers from the Fifth International Conference on Austronesian Linguistics, ed. by Ray Harlow and Robin Hooper, 349-375. Auckland: Linguistic Society of New Zealand.

D. Jauncey. 1997
A Grammar of Tamambo, the Language of Western Malo, Vanuatu. Unpublished PhD thesis, Australian National University.

Summary

The study of Tutuba language verbs
—Distinguishing the impersonal, intransitive and transitive verbs—

Maho NAITO

This study examines Tutuba language verbs based on my own fieldwork data. The goal is to distinguish the collected verbs from the features and aim to develop the further research and study because the collected data is not insufficient. I categorize Tutuba verbs into the following three, ① impersonal verbs, ② intransitive verbs(except the impersonal verbs), and ③ transitive verbs. The meteorological verbs are the impersonal verbs, and their features are to take dummy subjects. The verbs to sleep, to jump, to bathe, etc. and the verbs expressing existence and non existence are the intransitive verbs. The verbs to hit, to push, to break, and to tire etc., are the transitive verbs. Most transitive verbs end with the vowel '-i' and this is supposed to be the feature of it. There is a productive process which derives a transitive verb from an intransitive verb. When the suffix '-i, tei' attaches to the end of some intransitive verbs, they can be used as transitive verbs. I also found the verb which is supposedly the causative verb, but it requires more data because the collected sample is few. In order to make a more detailed study of the verb classification, as to verify the nature of the causative verb, further study of the Tutuba language is needed.